

また老人の組織器官には、もともと退行性変化がおこっているために、患者の示す臨床症状が非定型的となり、炎症の生体反応は質的には同一でも、量的に差異があらわれて来る。それゆえ、生体反応を媒体として行う診断法には種々な困難を伴い、本症の発見時期は遅れ勝ちとなり、ひいては手術時期も遅れることとなり、その上、組織器官に退行変性があるため、術後の回復は捗りからず、死亡率が高くなるものである。

なお茂木氏は、症例1のように慢性的な炎症が持続するもののなかには、虫垂を母地とする癌発生を否定できないものがあるとも述べられている。

このように、老人ではその虫垂炎に対して、生体の示す炎症反応が軽く、実際の病変自体の方が、はるかに重篤であることを常に想い、早期手術に努力せねばならないと考える。

結 語

私は2例のいわゆる老人性虫垂炎の外科的治験例を報告し、本症に関する若干の文献的考察を加え、私見を述べた。

(稿を終るに臨み、御校閲を賜った恩師白羽弥右衛門教授、ならびに第10回和歌山医学会総会における本稿の発表にさいして、終始御指導をいただいた恩師和歌山赤十字病院副院長内藤行雄博士に心から感謝の意を捧げる。)

文 献

- 1) 茂木藏之助：茂木外科各論，中巻，192，1947。（南山堂）
- 2) Carp, Arminio: American Journal of Surgery, 6; 21, 1952.
- 3) 小坂親知：日本医事新報，1512; 16, 1953.

蛔虫卵による結腸肉芽腫の1例

京都大学医学部外科学教室第2講座（主任：青柳安誠教授）

今 井 昭 和

〔原稿受付 昭和32年2月4日〕

THE GRANULOMA OF COLON CAUSED BY THE EGGS OF ASCARIDS: REPORT OF A CASE

by

TERUKAZU IMAI

From the 2nd Surgical Division, Kyoto University Medical School
(Director: Prof. Dr. YASUMASA AOYAGI)

Now that we have examined many surgical diseases caused by parasites after the end of war, it is not rare to see the granuloma formed with the eggs of ascarids in the intestines, but still we have received only a few reports that tell us about that kind of granuloma in the abdominal region.

I am reporting that in spite of such circumstances, lately we made a medical examination of the case who suffered from a large granuloma of colon caused by the eggs of ascarids.

緒 言

戦後、寄生虫により惹起せられた外科的疾患にしば

しば遭遇するようになった。したがって蛔虫迷入による諸臓器内のいわゆる虫卵結節形成も、あえて稀有な事では無い。しかし腹腔内に大なる結節形成を認めた

報告はなお数例にすぎない。最近、我々は横行結腸の一部並に下行結腸下部と強固に癒着した蛔虫卵を中心とする巨大な Granulom の1例を経験したので報告する。

症 例

患者：42才の農婦。

既往症：10年前胆石症で約1ヵ月治療をうけた以外特記すべきものは無い。

家族歴：特記すべきものは無い。

主訴：左側腹部の無痛性腫瘤。

現病歴：特別原因と思われる事も無く、昨年(1955)9月初旬頃から左下腹部に緊満感をおぼえていたが、9月10日、左側腹部に軽度の圧痛を有する腫瘤の存在するのに気づき、直ちに某外科医により経肛透視をうけ、其の際腫瘤は腸管とは全く無関係であると云われ9月22日当外科に来院した。発病来嘔気、嘔吐なく、発熱にも気附いていない。食欲、睡眠共に良好、便通1日1行、大便には特別異常を認めていない。

現症：体格中等度、栄養可良、脈搏約80、整、緊張良。体温は36.8～37.0℃である。

腹部は視診でなんら異常所見無く、触診で左側腹部

に長さ約20cm、幅約5cmの硬い腫瘤を触知し、此の腫瘤は軽度の圧痛を有し、境界は明瞭で、表面は粗慥皮膚との癒着は認められないが、下床との可動性は殆んど無く、又腹筋を緊張させても、いぜんと腫瘤の大きさには変化なく、しかも明瞭に境界を触知する。なお聴診で腸雑音には何んら異常を認めない。

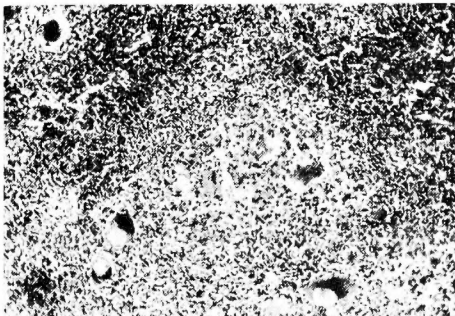
血液検査では赤血球数356万、血色素量72%ゼーリー、白血球数11,500、中性球76.0%、好酸球8.8%、淋巴球11.2%、大単核球4.0%で即ち好酸球増多とリンパ球減少が認められる。尿に何んら異常なく、大便に潜血反応は陰性であるが、多数の蛔虫卵を認めた。更に赤沈は30分30、1時間100、2時間130で平均82.5mmである。なお、経肛レ線透視の結果、腸管には狭窄部は認められなかつたが、しかし横行結腸が左下腹部に癒着固定された様な像が得られた。

手術所見：左傍正中線切開で開腹すると、腫瘤は一部体壁腹膜と強固に癒着し、これを剝離して行くと粘稠な膿汁の流出を認めた。この癒着を完全に剝離し、精査すると、腫瘤は全体として約超小児頭大で、下行結腸下部の前壁にのつかつた様に存在し、更にこれに横行結腸の一部が癒着している。しかし腸管壁のものには浸潤も無く、又その他リンパ節腫脹も認められ

第 I 図



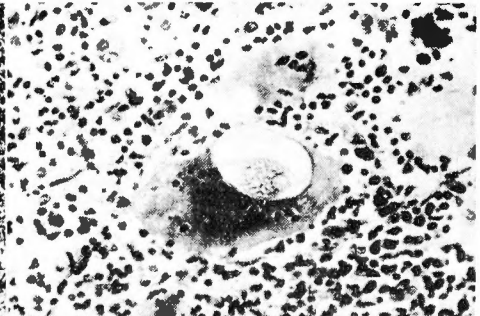
第 III 図



第 II 図



第 IV 図



なかつた。そこで下行結腸下部及び横行結腸を一部腫瘤と共に切除し、各腸管断端は端々吻合を施行して手術を終つた。剔出標本は図 I. II. の如くで、腸管そのものには肉眼的にも又組織学的にも特に変化も無く、腫瘤の組織学的所見は III, IV 図の如く、多数の蛔虫卵を認め、更に好酸球の強度の浸潤、異物巨噬細胞等の出現を見、明らかにいわゆる虫卵結節による線維性肉芽組織の像である。なお癌性変化は認められない。

考 按

虫卵が異物となり結節を形成する事は Laulanie が *Strongylus vasorum* の虫卵結節を肺内に認めて以来、諸家により諸種の虫卵が諸臓器にいわゆる虫卵結節を作る事が報告されており、本邦に於ては、しばしば、腸管壁に虫卵結節を作り、更に癌性変化をもたらす日本住血吸虫についての報告がみられる。しかして蛔虫卵による虫卵結節は肝臓をもつとも好発部位としているが、その他脾臓、或は胆嚢等、腸管と連絡のある諸臓器に発生する事は容易にうなずける所である。しかし腸管と直接連絡の無い腹腔内に発生した例も皆無ではなく、本邦文献をあわせて数例の報告が認められ、又かゝる肉芽腫の中には虫体の発見された例も1〜2報告されているが、本症例に於ては明らかに虫体と思われるものは認められなかつた。

さて、肉芽腫の成因については或は組織アレルギーの立場から論せられ、又エオジン嗜好性細胞の出現もこれを惹起する刺激物質は蛔虫体のみでなく蛔虫卵自身にも含有されると云われている。泉氏は、犬の脾臓内に蛔虫卵を注入した際、生きた蛔虫卵を注入すればその虫卵を中心としてエオジン嗜好性細胞の浸潤と共に脾臓に一定の炎症性反応を起し、遂には局所の結節性病変をみるようになるが、此の際死んだ虫卵を以て

しては、それは単なる異物としての反応を現わすにすぎないと云つている。

以上のように本例は病理組織学的に蛔虫卵結節である事は明らかであるが、しかし極めて多数の虫卵を証明する所見からして、雌虫が腸管外に脱出産卵したものと考えるのが妥当であろうと思われる。しかしその虫体迷入経路に至つては全く不明であり、恐らく腸管穿孔によるものでないかと想像されるが、癒着腸管壁には何んら炎症性変化も無く、まして穿孔を思わせる様な所見は肉眼的にも又検鏡的にも認められず、又既往に於ても腸穿孔を思わせる何ものも認められないので、これはあくまで想像の域を脱しない。

結 語

左側腹部の腫瘤を主訴とし、組織学的検査の結果、その迷入経路は不明ながら、少くとも腸管外に脱出した雌虫が産卵したと思われる蛔虫卵を中心とした巨大な肉芽腫の1例を報告した。

文 献

- 1) 弘中満：蛔虫による慢性脾臓炎の1例。外科，**13**; 5, 1951.
- 2) 近藤慧：いわゆる回虫卵結節に基因せる腹腔内腫瘤の1例。外科，**14**; 7, 1952.
- 3) 黒岩耕：蛔虫卵に基因する肝の限局性病変。日本病理学会々誌41巻総会号，1952.
- 4) 榊原宏：マンソン弧虫寄生による腹壁腫瘤の1例。外科，**14**; 6, 1952.
- 5) 佐藤権内：蛔虫卵による脾臓炎の1例。弘前医学，**5**; 3, 1954.
- 6) 島村宗夫：著明なる蛔虫寄生の剖検例。最新医学，**5**; 4, 1950.
- 7) 蘇金波：蛔虫迷入に依る腹壁膿瘍の1例。日本外科学会雑誌，**44**; 10, 1944.
- 8) 須崎巖：蛔虫による肝臓膿瘍の1例。外科，**13**; 1, 1951.
- 9) 矢田一：蛔虫迷入を伴う巨大なる脾臓膿腫の1治験例。日本医科大学雑誌，**19**; 9, 1952.